



ヴァイナル駅伝 (第8回)

セレクト・語り部: MURO 聞き手・書記: 二木崇 select by MURO text Takashi Futatsugi

第8区間・・・和ジャズ・フュージョンの哲人編

今号の中村照夫さんの記事に勝手にリンク？

氏の様に早くから海外のトップ・ミュージシャン達と肩を並べていた、
誇り高き和の侍や姫のお皿にスポットをあてた“和ジャズ”特集でいざ鎌倉へ(意味ナシ)。

照夫さん自身のグループと作り上げた①はH Hancockも参加した国際級名作。A面頭曲は後に笠井紀美子さんも取り上げた。そのハービー絡みの日本企画盤②は、ヘッドハンターズ出身の黒崎の初リーダー作。パーソネルも鉄板で、バックVo.はBIG MAMA こと亀淵友香さんに金子マリさん。羽織袴ジャケからも愛妻家ぶりが。③は同じ頃に日本で録られたハービーと和 DVA の歴史的邂逅作。タイトル曲や「処女航海」、「アズ」などのカバー曲も。ここでも友香&マリさんが。ラヴアンリミテッド・オーケストラなどで馴染み G ペイジの指揮のもと、D・T・ウォーカー、W ワトソンらがプレイした “最高のシンガー” 美奈子さんの④も素晴らしい。表題曲はいつもフロアを揺らし、「時よ」はいつも泣ける…真のクラシック。⑤も美奈子さんネタ。パシフィック・ジャムでも馴染みの松岡直也さんとちとジャマイカでレゲ界の大物とセッションした驚異的な1枚。渡辺香津美さんや上田正樹さんとも組んだスライ&ロビー や、A パパロにリコといったロックカーズな面子も最高！ スタッフの E ゲイルの『Negri』と併せて聴きたい1枚。「Concrete Jungle」は海外ディガーからの問い合わせも多いアプ。その松岡さんは80年に聖地へ。会場の熱気も最高の生録⑥はM サンタマリアも参加。⑦は古典ブレイクス『Dune』の2年後の同じNY録音作で、深町純さんとの共演もあったブレッカー兄弟や、香津美さん作品も制作した M マイニエリらに混じって大野俊三さん、益田幹夫さんも参加し、スパーシーなフュージョンを展開。この直後にはスーパーファンキー・サックスも始まる。⑧はその D マシューズが指揮をとるミッキーさんの4作目。渡辺貞夫グループに迎えられた79年 NY 録音の本作には A ジャクソンや B パーティーらの姿も。冒頭のドラマ・ブレイクで秒殺。R エアーズの『He is coming』で知られる幻のシンガーの⑨はレイニー&パーティーを迎えた貴重な1枚。79年 NY 録音の⑩は、スタッフの C パーカー、後藤次利さん(河合その子の旦那)と制作された、斉藤ノブさん(夏木マリさんの…) 名義の1st。うっふんクラシック『黄色いサクラボ』のカヴァーもイケる美にゴールデンな1枚。ジャケのスケルトンっぷりは、GNFのシャワーキャップより破壊力アリ。

海外進出した日本人ギタリストの先駆者といえば燦サマ。90年代中期の海外でのジャップ・ジャズ・ブームの際もクローズアップされ、UKのマスターカットからの『Classic Jazz-Funk』シリーズにも入ってたり…。以前米盤を選盤した『Juice』の邦盤⑪はまさにNYグルーヴ。アルト・フルートが、時折尺八の音色に感じられる郷愁も？ そう言えばシャーデーの新譜がキテますが、燦サマ版『Kiss Of Life』も是非ご賞味あれ！

⑫も米盤もジャケ違いで出た名作。セルメンの弟子でもある彼が、D グリーンシ、S ガット、ヒロシマの喜多嶋修(舞の父)らと、琴、琵琶ありの和洋折衷を。『Love Light』といえは YUTAKA さん (p)、P オースティンのデュエット名曲。⑬は日米ギターのネ申競演作。クロスオーバーの源=アルファのカタログにはここでkey で参加の深町さん(「エイ・ユー・ブルース」のアレンジも)の歴史的 NY ライヴ盤に、美奈子さん、そして YMO 他で知られるロック・ギタリスト=大村さんの H メイソン制作による2nd ⑭など国境を越えた名作多し。この20年後に大村さんは惜しくも故人に。先の L リトナーに、TOTOのJボーカロ、P ラッセン参加で、ホーン隊はJヘイラシーウィンドの面々。“日本のクインシー” こと上田さんのライナーも嬉しい。上田さん制作編曲作では横笛奏者の赤尾三千子さんの作品やザ・バズージャによる『Watermelon Man』なども俺クラシック。その上田さんが編曲し、後に伊丹十三作品の劇伴でも知られる本多俊之さんがパーリンらシーウィンドと共演した1st ⑮も最高。この後に出た『Lament』もプレイしたら必ず詠かれる曲。渡辺貞夫クインテット出身のトロンボーン奏者=福村博さんの⑯には “先生” のもと、D グリーンシ以下トップ・ミュージシャンが集結。タイトル曲や『White Clouds』には本当にお世話になりました！ ナベサダ×グリーンシ『カリフォルニア・シャワー』と同年。⑰には佐藤充彦さんアレンジの弦×4に、鈴木勲さん=ピッコロ、R カーター=アップライトの 双頭ベース炸裂。ジャケで着用のファー・ジャケットにはビッグバードもお手上げ？ ⑱も、太鼓に R ヘインズを迎えた。75年 NY 録音の快作。“ダブル大野真” は永遠のレーティーン。俊三さんはジャズ・メッセンジャーズに参加したことも。G エヴァンスや M デイヴィスにも認められた天才=菊池雅章さんのオルガンも嬉しいポイント。五郎さんは、私鉄沿線育ち…じゃない僕から見ても、ずっと音楽的な人。⑲は連郎さんがNY-LAで『Circus Town』を録ったのと同じ76年から4年間の海外録音ベスト。D サンボーン、L カールトンなどフュージョン・ファンならではの名演の数々。GO さんの24丁目バンド盤もよろしく哀愁。⑳は番外編！ 82年当時の僕もオールディーズっ子で、C ベリーの “ダックウォーク” に憧れた。『バック・トゥ・ザ・フューチャー』の1作目でもその真似から EV ヘイレンのライトハンドなんて粋なシーンがあったが、最近もチェス・レコーズの歴史を描いた『キャデラック・レコーディング』で C ベリー役のモス・デフィにヤラしたばかり。そんな大御所たちと渡り合った眩しい生録。S クロッパーからも愛されたメンフィスの名誉市民、日本のキング=清志郎さんにのリス ペクトを！ ●



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑩



⑪



⑫



⑬



⑭



⑮



⑯



⑰



⑱



⑲



⑳